

夏場の植物観測は苦行に似ている。丈の低い野草の写真を撮ろうと草むらにしゃがみこめばブーンと蚊が飛んでくる。法面ときたらこれはひどい。ボロボロ、ボロボロ蚊がぶつかってくる。長袖シャツを着ていても、顔といわず首といわず、カメラを構える手にはもちろん、ズボンの中まで蚊が刺してくる。小さな被写体を撮ろうと狙いを定めてじっとカメラを構えれば、それこそ蚊に刺されよう。これじゃまるで捨身飼虎ならぬ捨身飼蚊だ。そんな気は全然ないのに。

ところでこの時期、新たに花期を迎えた樹木はないので、今月は野草を主に見ていきます。

タカサゴユリ ユリ科ユリ属の多年生草本 花期は当地で8月中旬



10号棟西側のタカサゴユリ(8月16日)

法面草刈りの外注前に草刈り除外のマーキングしたかいがあって、8月中旬10号棟の西側付近に、一部は8～10号棟の前にも花を咲かせることができた。花が咲いている期間はほんの数日間、全体で見ても1週間から10日もなく、純白で気品のある花はまた来年を待ち望む余韻を残してあっという間に散ってしまう。

ところで、これまでこの花をテッポウユリと呼んできたが、今回調べなおしてみると、どうもタカサゴユリ(別名ホソバテッポウユリ)とすべきようだ。その点をお詫びし、訂正します。

テッポウユリとタカサゴユリの比較

(wikipedia より)

	花	花長	花期	葉	草丈
テッポウユリ	純白	10～15cm	4～6月	楕円形で長い	50cm～1m
タカサゴユリ	白だが薄紫の筋が入る。 純白もある	15～20cm	7～9月	細い	～1.5m

当地のユリはどの花も純白で薄紫の筋は入っていないのでテッポウユリとしてきたが、花期も葉も草丈もタカサゴユリの特徴を示している。さらにタカサゴユリでも純白のものもあるとのことで、今回タカサゴユリと訂正するものです。

タカサゴユリは台湾原産の帰化植物。観賞用として持ち込まれたテッポウユリとよく似た花で、テッポウユリと交雑種も多く変異が起きやすく、外見からはテッポウユリと見分けにくい。明るい原野や荒

れ地で繁殖する。

(参考; ,HP)

メマツヨイグサ アカバナ科マツヨイグサ属 花期;6~9月



メマツヨイグサは花径3センチ、草丈は50~150センチ以上。しぼんだ花は赤みが差さない。(8/26)

マツヨイグサに関しては、太宰が「富士には月見草がよく似合う」と書いたとか、夢二が「宵待草」と間違っただけと歌ったとかの話はあまりにも有名なもので、ここではその事にこれ以上触れない。

このように日本の夏の夜の風物詩として無くてはならない花で日本古来の野草のような気がするが、実は北アメリカ原産の帰化植物で、明治中期に渡来し各地の道端や荒地などに野生化したもの。

当団地の法面には見られないが、10号棟西側の陸橋を渡った付近や、旧わんにゃん跡地などによく咲いている。また、陸橋から少し先の遊歩道のわきの四角い植え込みに見られるのはマツヨイグサと思われる。但しこれは他の草花とともに、植えられたものと思われる。これらの花の違いは、まずしぼんだ時にメマツヨイグサは赤みをささないが、マツヨイグサは写真のように赤みをさしてくるのがいちばんの特徴である。

ところでこの拙い花の紹介を読んでいるシニア世代の方にお聞きしたいのですが、皆さんの子供時代の記憶の中のマツヨイグサ類の花はどんな花でしょうか。私が育った田舎(会津)での記憶は、花びらがもっと大きく、茎ももっとしっかりしていたような気がします。つまりオオマツヨイグサだったと思いますが、それが今、この近辺でも田舎でも見られません。花の小さいメマツヨイグサばかりです。『草木夜ばなし・今や昔』には、「戦前までは、東京近辺もオオマツヨイグサが多かったが、戦後はすっかりメマツヨイグサにとって代わられた。いま、オオマツヨイグサは関東地方でも山間に行かないと見られない」と記されている。植物の世界にもこのような変遷があるのです。

この花は「月見草」とか「宵待草」とかの愛称で、それが間違いであっても、「夏の夜」とか「月」に関連するメーヅで親しまれているのだが、この花はいつ咲いているのだろうか? 図鑑にも参考書にも「夕

方咲いて、翌朝しぼむ」と書いてあるが、どうも違うのではないか。ヒルザキツキミソウという花もあるがその事ではない。私は一日の終りに気分転換によく駅のドトールにコーヒーを飲みに行くので、薄暗い夜の7時から8時近くにいつもその側を通る。しかし一向に咲く気配はない。夜9時過ぎに帰るときには確かに咲いている。用事があって朝8時半頃に出かけるときにはすでにしぼんでいる。それでこれまでマツヨイグサの写真はストロボをたいて暗闇の花になってしまった。



明け方うっすらと赤みをさしてきたマツヨイグサ
花径3センチ、草丈50センチくらい。
しぼむと右の写真のように赤くなる。(8月26日)

それではおもしろくないので、早朝7時ころに見に行ってみた。まだ咲いていたがしぼみかけている花もあった。朝陽はまだ低い位置から差し込み、花びらに影を作っていた。側の植え込みのマツヨイグサもまだ黄色い花を咲かせていた。しかし、他の植物の写真を撮って30分後に戻った時には、マツヨイグサの黄色の花びらにうっすらと赤みが差してきていた。

つまり、私が観察する限り、マツヨイグサ類の開花は夜9時ころ、しぼむのは翌朝7時から7時半頃のようにであった。

では、図鑑や参考書が間違っているのだろうか。『緑の侵入者たち』という本に、日本の植物学者の研究結果としてこんな話が紹介されていた。「がくの基部にある一センチぐらいの部分に開花の決め手があり、この部分に当たる特定の波長の光線が、開花に影響を与える。太陽の光線は、開花を抑えるように働く」という。ここで気になるのが街灯の光である。私たちが住んでいる街には一晩中街灯が点いている。これが開花にどのような影響を与えるか？団地の区域外の街灯が無いところでメマツヨイグサの開花を確かめるか、それとも黒い袋を蕾にかぶせて見るか？このことはまだ確認していないので何も報告できません。この件も申しわけありません。

(参考； , , , HP)

ヤブラン ユリ科ヤブラン属 花期；8~10月

8月下旬、法面を歩いていて、小さな紫色の粒々(花)が総状というより柱のようについた可憐な花を見つけた。それがヤブランとの出会いだった。図鑑では細い葉と花柱をいっぱい茂らせてたくましく

見えて、別種かと思えるほどだったが、間違いなくヤブランだった。北法面、東法面を探すとあちらこちらに生えていた。その中で一番よく茂っていたのは、北進入路脇の角付近に生えていた一株だった。



東法面で見かけたヤブラン(8月20日)、北進入路脇の角付近に生えていたヤブラン(8月26日)

ヤブランは日本を含む東アジア一帯に生育する多年草で、冬でも葉が枯れずに青々としている常緑性の植物です。樹木の下での薄暗い藪に生えているのでこの名がついた。つまり、生育は旺盛で耐陰性も非常に強い性質なので、他の植物が育たないような日陰に植えることも可能で、土留めやグランドカバーにも使われています。8,9号棟入口の両側に植えられているのもヤブランの一種です。(参考; ,HP)



左; ヤブランの花

上; 土留めとして植えられたヤブラン

右下、道路側がリュウノヒゲ、その左上の列がヤブラン

ゲンノショウコ フウロソウ科フウロソウ属 花期；7～10月

この花についてどの本にも「下痢止めの民間薬として有名で、飲むとすぐに薬効があるから、現の証拠の名がある」と書かれているが、現在薬草として使われる場合があるのかどうか分からない。私にとっては可愛らしい花の代表で、夏の終わり頃から法面を探し回っている。図鑑には花期は上のよう書いているが、当地では9月になって東法面で見られた。（左9月9日、右9月27日）



写真を見ていただければ分かるように、当地では紅紫色の花である。図鑑には「東日本は白い花、西日本は紅紫色の花が多い」と記され、日野市で撮られた白い花が載っている。「静岡県あたりが境界のようだ」とわざわざ地名をあげて記している本もある。だからまた分からなくなる。なぜ、当地では赤なのか？一時多摩市の環境団体に顔を出した事がある。「この付近は、赤なのか、白なのか？」仲間には聞いかけると「たぶん白だろう」との答え。ではなぜ、わが団地には赤いゲンノショウコが咲くのか。ずっと悩んでいた。

本当はこの周辺をくまなく歩いて調べるべきなのだが、その余裕もない。それでインターネットで検索をかけて見た。神奈川県相模原市では白、多摩市桜ヶ丘公園では白・・・、中には関東でも紅、関西でも白の花もあると記しているものもあった。そして「ごまのはぐさのこまごまことのは」のページを見つけた。各地のゲンノショウコの花の色の分布を調べていて、茨城、東京、神奈川では赤白混生と記され、地図上には多摩地区は赤、調布は白のマークが入っていた。

ゲンノショウコの花の色の分布は単に「東日本は白い花、西日本は紅紫色の花」と割り切れるものではなく、その傾向の分布を示しながら、赤白混生している所も所々にあるようだ。

この赤いゲンノショウコは数年前まで中央広場にも咲いていた。本当に小さな可愛らしい花だった。あまりに可愛らしい花なので、ある方が採って行って自宅のプランタンに植えたところ、大きく成長したとの事。つまり、一斉草取りで刈り込まれ、その後に生えてきた花なので十分に成長できず、小さな

葉で、小さな花を咲かせていたようなのだ。その方は、「保護しようにも、一斉草取りで刈り込まれてしまうのでどうしようもない」と諦められた。今年も何度も探し回ったが、中央広場には一本のゲンノショウコも見つからなかった。

法面も同じような状況。これまでは見逃されて何株ものゲンノショウコが生えていたが、今年の草刈り外注で刈り込まれてしまった。探し回ってようやく数株のゲンノショウコを見つけたが、やや小ぶりの葉だけのものが多かった。無くなってしまったかため息をつきながらも、何度も法面を探し回り、9月に入ってようやく1本の花を見つけ、しばらくたってまた1本咲いているのを見つけた。無いよりはましかと思いながらも、9月末の草取り前に念のため見に行くと、今まで探していた場所より少し離れたところにゲンノショウコの群生を見つけた。驚くとともに、ほっと胸をなでおろした。



ようやく見つけたゲンノショウコの群生 (9月27日)

り外注で刈り込まれてしまった。探し回ってようやく数株のゲンノショウコを見つけたが、やや小ぶりの葉だけのものが多かった。無くなってしまったかため息をつきながらも、何度も法面を探し回り、9月に入ってようやく1本の花を見つけ、しばらくたってまた1本咲いているのを見つけた。無いよりはましかと思いながらも、9月末の草取り前に念のため見に行くと、今まで探していた場所より少し離れたところにゲンノショウコの群生を見つけた。驚くとともに、ほっと胸をなでおろした。

(参考; , , , HP)

ミズヒキ タデ科 花期; 8~10月



北東法面のミズヒキ。上側が赤く下側が白いので、祝儀袋の水引に例えられる。(9月18日)

日本や中国の温帯に分布する多年草。林のふちや藪など半日陰の場所に普通に見られる花で、北東法面を始め、法面の所々に生えている。茎の先に30センチくらいの花穂に、米粒のように小さい花がびっしり並んで付いている。花が小さいので近くで見ないと分からないが、米粒のような花を上から見ると赤く、下からは白く見えることで、祝儀袋の水引にたとえられてこの名前がついた。

米粒のように見えるのは実はがくで、まばらに4弁の花を開く。あまりに小さいのでルーペで見ないとよく分からないほど。写真を撮るのも一苦労、カメラにはマクロ機能は付いていても自動焦点、つまりバカチョンなので、背景ばかりにピントがあってしまう。仕方がないのでバックに厚紙を置いてどうにかごまかして撮っている。あまりよくピントが合っていないですみません。

ミズヒキの名が示すように縁起植物でもあり、昔、不忍池の弁天堂の参道に植えてあったのを見た事があるが、今回確かめに行ったらもうその気配もなかった。 (参考; , HP) 右はミズヒキの開花



わが子がまだ小さかった頃の話だから、かれこれ20年くらい前の事、家のかみさんが(こういう言い方をすると古い人間であることがばれてしまうが)娘を連れてレンガ坂を上がってきたところ、少し前を何か動物が行く手を横切ろうとして、自分たちに気付く、あわてて引き返し道路わきの草むらに逃げて行ったという。その顔つき、胴周り、そして何よりふんわりしたしっぽが・・・犬ではなかった。動物好きの娘も「あれはタヌキよ」と太鼓判を押した。クロスガーデンのできるずっと前、あそこの斜面は草むらだったし、近くの公園の草むらもあり、この多摩地区にタヌキがいてもおかしくない。なんせアニメになった位だもの。

では、タヌキがいるならキツネは？それがいるのです。狐の孫がいるのです。いや、キツネノマゴが生えているのです。

キツネノマゴ キツネノマゴ科

花期；8～10月

道端などに普通に見られる高さ10～40センチメートルの1年草。わが団地の居住区内にも法面にもちょっとした草むらを覗きこめばどこにでも生えています。だから、初めはこの草を取り上げるべきかどうか少し迷いました。草むらに埋もれるように生えていて、ほんの目立たない花をポツンポツンと付けているだけ。無視しようかとも思ったくらいです。





キツネノマゴの伸びた穂は尻尾、花は獣の口。草丈は20～30センチ以上に伸びる。(8月28日)

家に帰り図鑑を調べたら、これがキツネノマゴでした。なんでこんな名前がついたのだろう。インターネットを検索しても、「名前の由来はよく分かっていない」とのこと。

何度も写真を取りに行き、手に取り眺めていると、次から次へと空想が湧いてきます。花がつく穂は少しずつ伸びてきて、そのふわっとした感じはまさしく狐のしっぽ。子供よりもっと小さいので孫のしっぽ。花は長さ約8ミリメートルのごく小さいが、上唇は短く、下唇は少し長く、開いた状態を横から見たらまさしく獣の口。見た目は草むらに紛れてしまう程の小さな草、ホームページの記事にも「小柄な雑草」と記されているが、どっこいそんなに小柄な草ではない。その草の茎を手にとれば根元で枝分かれして、草丈は30センチ以上もあるものもある。もっと小型の草花はいくらでもある。そんな草丈を持ちながら小さな花で小型の草のように見せかける、これはつまり目くらましの術。人の目をくらます草なんて、よくぞキツネノマゴの名前を付けたものよと、一人合点で納得した。(参考; , HP)

ヘクソカズラ アカネ科ヘクソカズラ属

花期; 8~9月 (写真8月26日)

日当たりのよいやぶや草地、土手などにごく普通に見られるつる性の多年草。居住区にも法面にも見られたが、草取り後に生えてきたものは葉も花もやや小ぶりな感じだった。写真の花は10号棟西側の囲いの縁に生えていたもの。見過ごされたもののように普通の大きさの花だった。

花は約1センチの鐘形で、先はめくれて5枚の花弁のようになる。ちょっと見た目



にはけっこうきれいな花である。しかしこの花にはへ・クソ・カズラ（屁糞蔓）という気の毒な名がついている。それで指で葉や花をつぶすように触ってみたが変な匂いはしなかった。説明をよく確かめたら“もんだり、つぶしたりすると嫌な匂いがする”と言う。そこまでは確かめないでしまった。

(参考;)

ヨウシュヤマゴボウ ヤマゴボウ科ヤマゴボウ属 花期; 6~9月

8月下旬、東駐車場の中ほど、車の後ろとフェンスの間隙に変わった植物を見つけた。タコの足のイボの様にポツポツしたものがいっぱいついていて、それが花だった。いや、白い花びらに見えるのがかくで、カボチャのように見えるのが子房とのこと。花弁はないのだという。



左
上
;
ヨ
ウ
シ
ユ
ヤ
マ
ゴ
ボ
ウ

左下; 全体の姿

の花 右上; 花穂 (8月24日)
右下; しばらくたって子房が膨らんできた (9月14日)

この植物は、北アメリカ原産の多年草でヨウシュヤマゴボウという有毒植物。根にも葉や実にも毒があり、ホームページの情報にも、「ヤマゴボウとは全く別物なので注意」とか、「ブルーベリーと間違っ

て食べないように」などの注意書きがある。

子房はしだいに大きくなり、茎も少し赤みがかってくる。9月末、一斉草取りの前に見に行った時は茎はだいぶ赤らんできているがまだほろ酔い加減、実が熟すにはもう少し期間が必要のようだった。しかし、このヨウシュヤマゴボウは一斉草取りで刈り取られたので、代わりに写真を掲載したい。

9月11日、田舎に帰省した時、市内で見つけたもの。雪国は秋の訪れも早い。ヨウシュヤマゴボウの茎は真っ赤になり、実は黒紫色に熟れて、すっかり葡萄酒漬けみたいな感じだった。この様子を見ると、名前に“ヨウシュ”という名が被せられているのが納得できようというもの。



9月27日 茎が赤らんできた。



9月11日会津で見つけた。すっかり熟れていた。

(参考; , HP)

【8～9月の樹の実の状態】



イヌエンジュ(8/24)



エンジュ(9/27)



マンリョウ(8/26)



オオバヤシャブシ(8/26)



イロハモミジ(8/26)



オニグルミ(9/14)



ハナモモの実熟す、落果(8/20)



トチノキの実の落果(9/6)

【トピックス】

花を追っているとどうしても昆虫との関わりができてくる。今回はそんな話題を2件紹介したい。

カタバミにシジミチョウ

カタバミは黄色い小さな花で花期は5~7月と記されているが、陽のあたる場所に今でも咲いている。

直径約8ミリほどの小さな花なので、マクロ機能を使ってこの花の写真を撮ろうとすれば、かなり近付いて撮ることになる。そんな時にカタバミの花にとまったのがヤマトシジミだ。ヤブガラシにとまったアオスジアゲハは先月紹介したが、今回はかまえるカメラのすぐ前に飛んできたのだ。蝶って人間を恐れないのだろうか？(8月24日)



そんなことを考えていたら、わが子がまだ幼かった頃に東部動物園の昆虫館に連れて行った時のことを思い出した。子供を喜ばせようと砂糖入りの麦茶を手にかけてそっと手を差し伸べたら、蝶が私の手にとまり口吻をのばし蜜を吸おうとする。手がくすぐったかった。

蝶は身動きしなければ、たとえ人間でも、警戒しない生き物なのかもしれない。

ヤマトシジミは本州東北地方より奄美群島に至る各地に広く分布する。常に地上低く飛翔し、カタバミその他の草花に蜜を求める。幼虫の食草はカタバミ(カタバミ科)〔友人からの情報〕

しぼむメマツヨイグサに隠れているもの

メマツヨイグサのしぼんだ状態も写真に収めておこうと、何気なく写真を撮り自宅のパソコンで拡大してみた。ぼくはアッと驚いた。メマツヨイグサに昆虫が隠れていたのだ。分かりますか？写真をよく見てください。大きな昆虫が、つまりカマキリがメマツヨイグサの茎にとまっています。メマツヨイグサの左側、もう一本のメマツヨイグサであるかのように。そこから足が見えるので虫だと分かります。そして頭は小さいので目立ちません。何をしているのか？初めはメマツヨイグサの蕾をかじっているのかと思いましたが、蕾の下に茎がありません。自分の足ですね。足のいぼいぼが見えます。 (8月26日撮影)



つまりこれは擬態です。カマキリに擬態なんて聞いたこともありませんが、植物と一体化して身を隠すのは擬態という行動です。それと知らずに飛んでくる虫を捕ろうと身構えているのです。

擬態；攻撃や自衛などのために、からだの色や形などを、周囲の物や植物・動物に似せること。(Wikipedia)

【参考書】

- 『草木夜ばなし・今や昔』 足田輝一著 草思社
 - 『緑の侵入者たち 帰化植物のはなし』 浅井康宏著 朝日選書
 - 『薬草歳時記』 鈴木昶著 青蛙房
- ～ の参考書は前号までの報告末尾をご覧ください。

(石川)